

平成 28 年 9 月 20 日

はこぎき  
箱崎遺跡 九州大学箱崎キャンパス中央図書館前南地点 記者発表資料

九州大学埋蔵文化財調査室

所在地 福岡市東区箱崎 6-10-1 九州大学箱崎キャンパス  
中央図書館地区・中央図書館前南地点 (図 1・2)

調査面積 約 120 m<sup>2</sup>

調査年月日 平成 28 年 8 月 22 日～10 月 14 日 (予定)

\*平成 28 年 9 月 21 日 (水) 14:00～16:00 に現地にて説明会を開催します。

## 1. 調査の経緯

九州大学では、統合移転推進事業にともない箱崎キャンパスの埋蔵文化財調査を進めています。箱崎キャンパスは、<sup>はこぎきぐう</sup>箱崎宮の創建以降に形成された都市・集落—箱崎遺跡の一部にあたり、これまでの調査により、古代末～近世の遺構や遺物の存在が確認されています。また、北に接する地点には史跡元寇防塁（<sup>じぞうまつばら</sup>地蔵松原地区）があり、この延長線上に位置する箱崎キャンパス内を南北に貫くかたちで元寇防塁が築かれたと指摘されてきました（中山 1914）。平成 28 年度上半期は、旧理学部 2 号館前南地点（530 m<sup>2</sup>）、中央図書館前南地点（120 m<sup>2</sup>）の発掘調査を行っています。

旧理学部 2 号館前南地点の調査では、砂丘列 2 列の間から溝（幅 14m、深さ 1.5m）、土坑 2 基などが検出されました。溝からは、龍泉窯系・同安窯系青磁、朝鮮王朝象嵌陶磁などの貿易陶磁器、土師器、須恵器、土錘・石錘などが出土しています。12～16 世紀を主体とする時期に形成された遺物包含層です。また、調査区内の海側の砂丘頂部では、こぶし大～人頭大の泥岩礫群の集中が確認されました。これらは、石積み遺構を築造する際によく用いられる礫（裏込石）が散在したものと考えられます。

本調査中に、旧理学部本館と中央図書館との間を走る舗装路でガス配管の切替え工事が行われ、大型の礫 2 点が並んで発見されました。また周囲には、旧理学部 2 号館前南地点でみつかったものと同様の礫群が散在していました。ここは、史跡元寇防塁（地蔵松原地区）と旧理学部 2 号館前南地点での裏込石の集中地点とを結ぶ地点にあたります。この付近に、元寇防塁の一部が良好な状態で保存されている可能性があります。そこで、発見された大型礫群が北側に向かって連なり、列をなすのかを確認するため、中央図書館南側の空閑地で発掘調査を行いました。

## 2. 発掘調査の成果 —南北に延びる石積み遺構の発見— (写真 1・2・3・4)

今回調査したのは、箱崎キャンパスの中央図書館南側の 2 地点です。防音講義室に接する調査区（西地区）で掘り下げを行ったところ、地表下約 1.3m で大型の角礫が、南北 17m 以上にわたって整然と並ぶことが判明しました。

基底石とみられる 40～70 cm大の角礫が、博多湾側に面を揃えて 20 石以上、直線的に並びます。これらは、もともとの位置からほとんど動いていません。大型石材の西側の面を丁寧に加工し、平坦面が作られています。あいだに角礫を詰め込み、石材を 3 段ほど積み上げた部分も一部に残っています。現存する遺構の高さは約 0.9m を測ります。また、石積みから約 2 m の範囲内からは、こぶし大～人頭大に砕かれた石片が多数見つかりました。これは、積み重ねた大型礫群の隙間を充填した裏込石であり、後代の人為攪拌や樹木根による攪拌の影響を受けて、もともとあった位置から散乱したものとみられます。大型の角礫には主に礫岩、裏込石には礫岩・砂岩が用いられています。なお、周辺から土師器や陶磁器の破片が少量発見されていますが、この遺構にともなうといえる出土状況にはありませんでした。そのため、出土遺物から遺構の築造時期を特定することは、まだ難しいところです。

今回発見された遺構は、場所や構築方法から、文永の役（1274 年）の後、再度の蒙古襲来に備えて薩摩国が造営分担したとされる元寇防塁の一部である可能性が高いと考えられます。元寇防塁であるとすれば、国内に残る類例のなかでも残存状況が非常に良好です。学術的価値も高く、構築方法や築造分担の特色を把握できる可能性を秘めています。全貌を明らかにするためには、今後さらなる追跡調査と検討を進めなければなりません。

### 3. 箱崎地区の元寇防塁について

元寇防塁は、文永 11（1274）年の蒙古襲来（文永の役）の後に鎌倉幕府の命により、九州各国の分担で博多湾岸に総延長約 20 km にわたって築造されました（図 3）。高さ約 2～3 m（諸説あり）の石築地です。今津地区は大隅・日向国、長垂地区は豊前国、生の松原地区は肥後国、姪浜地区は肥前国、博多地区は筑前・筑後国、箱崎地区は薩摩国、香椎地区は豊前国が、領主の所領に応じて割り当てられた範囲を分担しました。昭和 6 年 3 月 30 日、今津、今山、長垂、生の松原、向浜、脇、百道、西新、地行、地蔵松原の 10 地区が国史跡に指定されました。昭和 56 年 3 月 16 日に今津地区の一部が追加指定されました。

石堂川（御笠川）と多々良川の河口を結ぶ約 3 km の箱崎地区を、薩摩国が築造分担しました。元寇防塁の築造は、建治 2（1276）年 3 月ごろから始まり、同年 8 月には一応の完成をみたとされていますが、箱崎地区の場合、建治 3（1277）年や弘安 7（1284）年に石築地を築造したという史料があり、建治 2 年には全部が完成せず、築造が継続したと言われていいます。元寇防塁の位置については、中山平次郎・元九州大学医学部教授が、九州大学医学部構内（グラウンド横）から箱崎網屋の墓地、九州大学旧工学部、農学部構内を貫いて地蔵松原墓地にいたる微高地上に立地すると述べています（中山 1914）。また、那珂川の河口東岸から多々良川の河口までの区間は、防塁が嚴重に築かれた可能性があります（大塚 2013）。

史跡元寇防塁（地蔵松原地区）では、大正 9 年に全長約 8 m の範囲を武谷水城氏が発掘調査しています。石列高は 60.6～106.1 cm、石列幅は 60.6～72.7 cm、石材は大きいもので幅 84.8 cm、高さ 30.3 cm、厚さ 45.5 cm と報告されています（武谷 1922）（写真 5）。平成 5 年には九州大学農学部演習農場（地蔵松原防塁）、平成 12 年には JR 鹿児島本線軌道下（元寇

防塁跡第9次調査)で、福岡市教育委員会が発掘調査をおこなっており、ともに防塁の一部とみられる礫が散布する状況が確認されています(図4)。

**参考文献** (五十音順)

- 井上繭子 2008「博多の元寇防塁」大庭康時・佐伯弘次・菅波正人・田上勇一郎(編)『中世都市・博多を掘る』海鳥社, 48-51 頁
- 榎本義嗣 2008「箱崎」大庭康時・佐伯弘次・菅波正人・田上勇一郎(編)『中世都市・博多を掘る』海鳥社, 52-55 頁
- 大塚紀宜 2013「元寇防塁と博多湾一防塁の構造とその戦略的機能について」『新修 福岡市史一特別編』自然と遺跡からみた福岡の歴史 福岡市, 302-317 頁
- 武谷水城 1921「多々良以東元寇防塁有無に就て 附香椎発掘の石塁」『筑紫史談』第24集 筑紫史談会, 32-41 頁
- 武谷水城 1922「多々良以東元寇防塁有無に就ての補足 香椎発掘の石土混塁と地蔵松原発掘の石塁」『筑紫史談』第25集 筑紫史談会, 33-36 頁
- 中山平次郎 1914「管崎の防塁」『筑前史談会講演集』第1輯 筑前史談会, 51-79 頁
- 福岡市教育委員会埋蔵文化財課(編)2000「0035 元寇防塁跡第9次調査(GKB-9)」『福岡市埋蔵文化財年報VOL.15 平成12(2000)年度版』福岡市教育委員会埋蔵文化財課, 52-54 頁
- 柳田純孝 1988「元寇防塁と中世の海岸線」川添昭二(編)『よみがえる中世1』東アジアの国際都市 博多 平凡社, 180-194 頁

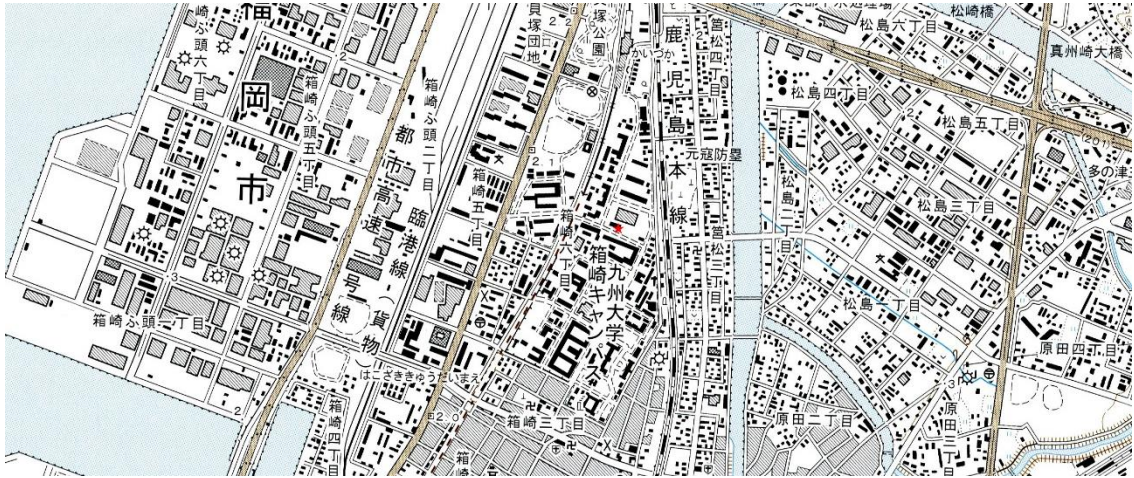


図1 調査地点の位置 (S=1/25,000)

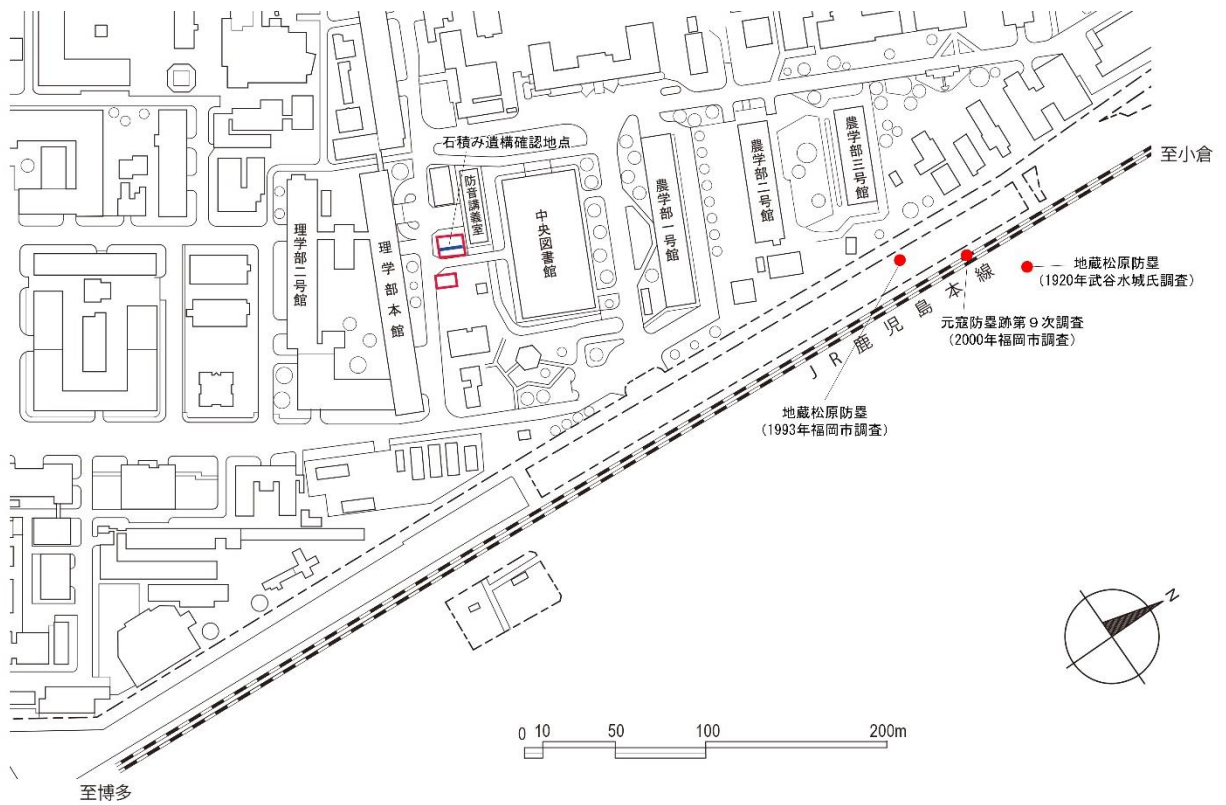


図2 調査地点の位置と石積み遺構の確認地点



写真1 石積み遺構検出状況（北東から）



写真2 石積み遺構検出状況（北から）



写真3 北側拡張区石積み遺構検出状況（南西から）



写真4 石積み遺構細部の状況（北西から）



図3 元寇防塁の位置と調査地点（井上 2008 を一部改変）



写真5 地藏松原における元寇防塁検出状況（大正9年）（武谷 1921）

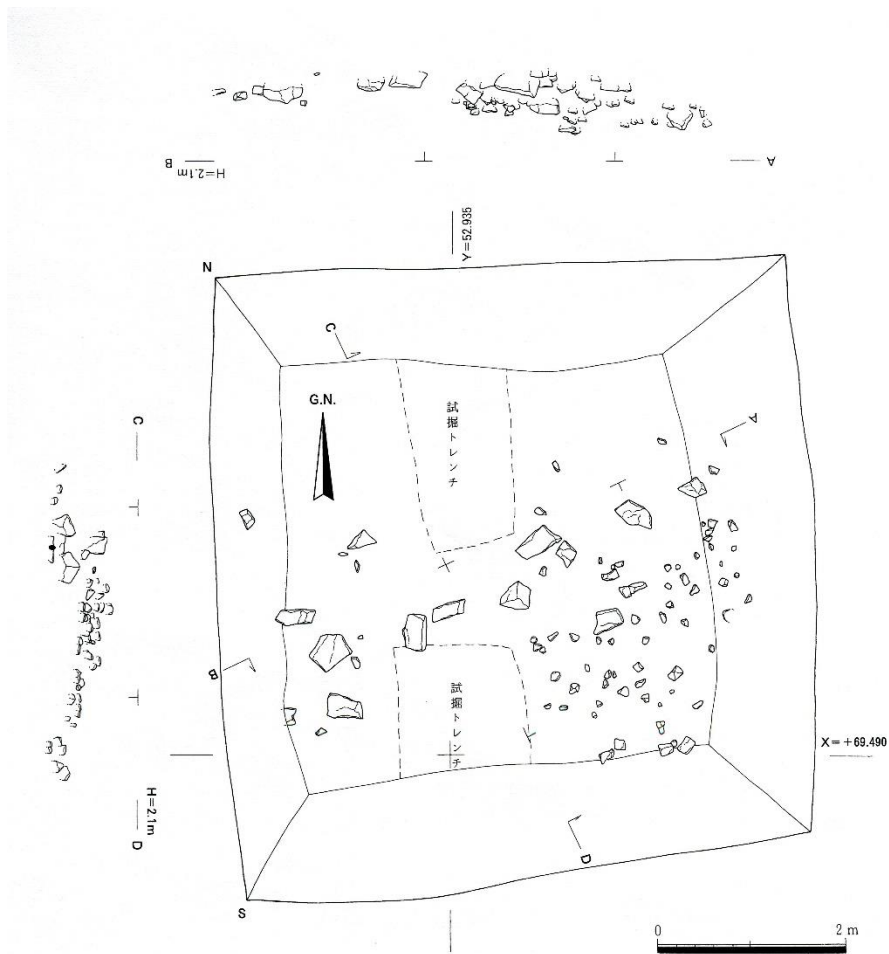


図4 元寇防塁跡第9次調査 調査区平面図 (S=1/80)  
 (福岡市教育委員会埋蔵文化財課編 2000)



図5 『蒙古襲来絵詞』に描かれた生の松原の石築地 (宮内庁三の丸尚蔵館蔵)